

研究課題名：がん患者や家族が必要とする社会的サポートやグループカウンセリングの有用性に関する研究

課題番号：H19—がん臨床—一般—008

研究代表者：東海大学医学部基盤診療学系教授 保坂 隆

## 1. 本年度の研究成果

週1回90分で5週間行うグループ療法を、がん患者や家族のための心のケアのひとつのモデルとして、その効果と応用性について検討している。

まず、このようなグループ療法ができるファシリテーターを養成する講座を全国で展開し、本年度の終了時には約1,000名の医療従事者が2.5時間×3セッションから成る講座を受講したことになる。教材としての約100ページのテキストと4枚組（3セッション、リラクゼーションビデオ）のDVDも完成したので、今後の研修の仕方にオプションが増えたことになる。

養成講座の受講者を対象にしてファシリテーター適性調査表を因子分析すると、ファシリテーターに必要な適性として「状況判断力」「人間関係調整力」「言語表現力」の3因子が抽出された。

乳がん患者のグループ療法の効果をみる研究では、まず乳がん専門病院で根治手術を受けた患者さんで同意の得られた、20-79歳の女性患者100人を対象に、QOLと心理・社会的機能調査を、登録時・5週目・6ヶ月目の3回行った（非介入研究）。次に、同様の条件の患者を対象にしてグループ療法を施行し、その後非介入群と同じ調査を行った（介入研究、今年度は24人登録）これまでの比較検討によると、非介入研究では

- ① EORTC Symptom scale/items ; DY で有意なスコアの上昇（悪化）
- ② MAC scale ; FS, AP で有意なスコアの低下（改善）
- ③ EORTC Functioning scale, POMS, 自己効力感尺度 ; 有意な変動な一方、介入研究では
- ④ MAC scale ; FS で有意なスコアの低下（改善）
- ⑤ EORTC QLQ, POMS, 自己効力感尺度 ; 有意な変動なし

となり、現時点では両群での有意差はみられなかった。今後、介入群の対象者を増やしていく予定である。

次に、このグループ療法を、肺がん患者の家族を対象にした場合の効果を検討する準備研究を行った。NH0近畿中央胸部疾患センターに入院治療または通院治療の肺がん患者およびその家族で、①患者の適格基準：20歳以上、肺癌と診断され病名告知を受けている、PSで0～3、など。②家族の適格基準：①の適格基準を満たす患者の家族、重篤な認知障害がない、などを満たした者が対象である。主たる調査項目は、がん患者・家族のグループ療法の認知度・希望する内容や構造に関する質問、などである。倫理委員会の承認を受け、現在400例（患者200例、家族200例）を目標として調査中である。

さらに、このグループ療法の遺族ケアへの応用についての検討を行った。滋賀県立成人病センター緩和ケア病棟において、退院後6ヶ月以上（死別後6～11

カ月) 経過したご遺族を対象にして、質問表への記入のみをお願いするか(非介入群)、「質問表への記入+グループ療法」(介入群)を施行した。現時点で、介入群5名にグループ療法を、非介入群(41名)に質問紙調査のみ実施した。それによれば、介入群ではGHQ「不安と不眠」の減少、POMS「抑うつ」と「疲労」の減少が顕著であり、グループ療法はグリーンワークでも、不安や抑うつを軽減する効果があることが示唆された。今後は介入群を増やしていくが、休日に開催するなど、希望者が参加しやすい設定が望まれる。

一方、グループ療法だけでなく個人精神療法も、ある程度の「構造化」が望ましく、具体的には週に1回で計5セッションとした「構造化された個人精神療法」を考案した。各セッションは①心理教育、②ディスカッション、③リラクゼーションから構成され約30分で実施する。評価はProfile of Mood States (POMS)短縮版、Mental Adjustment to Cancer (MAC)尺度、その他を用いる。初発乳がん患者を対象にしたもので、倫理委員会で承認された現在、対象をリクルート中である。

最後に、これらのグループ療法の研究とは別に、終末期がん患者とその家族による患者のQOL評価の差異を検討した。その目的は、家族が認識した終末期がん患者のQOLは、患者へのケアの質、家族の介護負担感に重要な影響を及ぼし、患者/家族への心のケアの方法にも修正が必要であると考えられるからである。緩和ケア病棟に入院中のがん患者とその主要な家族介護者のペア134組を対象にして、自記式質問紙による調査を実施した。その結果、吐き気や痛みなどの観察可能で具体的な症状に関する項目では、家族は患者の状態を正確に評価できるが、患者の心情や価値観に関する項目については患者・家族間の一致度は低かった。終末期がん患者・家族間への心のケアは両者間のQOL評価の不一致を軽減し、家族の心理的負担を緩和するために有効であることが示唆された。

## 2. 前年までの研究成果

がん患者へのグループ療法ファシリテーターの養成講座を全国6カ所で実施し、その教育的効果を検討した。受講者は計358名であった。サイコオンコロジーに関する知識を問う質問票のスコアを前後で比較した結果、平均点は有意に増加し、この養成講座には一定の教育的効果があることがわかった。

また全国のがん診療連携拠点病院286施設を対象に、がん患者・家族の心理的サポート体制について実態調査を行った。その結果、構造化されたグループ療法を実施していたのは7病院のみであり、実施できない理由として、9割の病院が「診療報酬ではないから」と、「トレーニングを受けたスタッフがない」ことをあげた。その意味では、ファシリテーター養成講座の必要性を裏付ける結果が得られたことになる。

また、乳癌術後患者を対象とした心理社会的グループ介入療法の効果を、心理社会的機能/QOLだけでなく医療経済面からも実証する計画を開始した。まず対照群のデータを把握するために、患者100人を対象として、介入は行わずに、QOL/心理社会的機能に関する調査を縦断的に行った。

### 3. 研究成果の意義及び今後の発展性

全国で約1,000名の医療従事者が、がん患者グループ療法のためのファシリテーター養成講座を受講した。講座のテキスト（100ページ余）と、DVD3枚組とリラクゼーションビデオ1枚（一式でDVD4枚組）も完成したので、今後の研修方法に、ひとつのオプションが追加されたことになる。

この計5回から成るグループ療法を、がん患者の家族や、遺族ケアなどにも応用できるかどうかを検討中であり、効果的なプログラムの完成が1年以内に期待できる。また、このグループ療法を乳がん患者に適応した場合の、QOLや医療費への影響を検討することにより、「診療報酬化」を目指していきたい。診療報酬化により、すべての病院がこの手法を導入すれば、がん患者や家族のための「心のケアの均てん化」が可能になっていくからである。

### 4. 倫理面への配慮

本研究は臨床研究に関する倫理指針、および疫学研究に関する倫理指針に従い、患者さんやご家族を対象としたアンケート調査と介入研究は、当該施設の倫理委員会に申請し承認された後に研究に着手した。アンケート調査と介入研究に関しては、研究用に新たに割り当てたID番号での解析を行うなど、特に個人が同定されないように留意した。

### 5. 発表論文

1) 保坂 隆：がん患者のためのグループ療法のファシリテーター養成講座の実際と意義。総合病院精神医学20：156-163, 2008

2) 保坂 隆：グループ療法のファシリテーター養成講座の実際と意義。緩和医療学10：56-61, 2008

3) 中村千珠、河瀬雅紀. がん患者への心理的サポートプログラム作成に向けての基礎的研究－患者の現状とニーズの把握－。心身医学47：111-121, 2007

4) 中村千珠、河瀬雅紀、保坂 隆：がん診療連携拠点病院における心理社会的サポート。総合病院精神医学20：129-138, 2008

5) 石川和穂、松島英介：終末期がん患者と家族介護者による患者のQOL評価の一致の重要性－家族は患者のQOLをどのくらい正確に評価できるのか－。精神科11:68-72, 2007.

6) 下妻晃二郎：緩和医療におけるQOLの評価と対応。緩和医療における精神症状への対策。緩和医療学 10(1)：31-36, 2008

## 6. 研究組織

①研究者名	②分担する研究項目	③最終卒業学校・年次・学位・専攻科目	④所属機関及び現在の専門(研究実施場所)	⑤所属機関における職名
保坂 隆	・多職種によるファシリテーター養成講習会の実施 ・総括	慶應義塾大学医学部・1977年卒業・医学博士・精神医学	東海大学医学部基盤診療学系・精神医学	教授
松島英介	・進行がん患者と家族のQOL評価	東京医科歯科大学・1980年卒。医学博士・精神医学	東京医科歯科大学大学院心療・緩和医療学分野・精神医学	准教授
河瀬雅紀	・乳がん患者への個人精神療法の実施	高知医科大学・1984年卒・医学博士・精神医学	京都ノートルダム女子大学心理学部心理学科・精神医学	教授
下妻 晃二郎	・全研究におけるQOL評価方法の確立 ・乳がん患者のグループ療法のコーディネータ	大阪大学大学院医学研究科博士課程・1985年卒・医学博士・外科学	立命館大学理工学部化学生物工学科・医療管理学, 臨床疫学, 臨床腫瘍学	教授
堀 泰祐	・遺族へのグループ療法の方法の確立とその効果判定	京都大学医学部・1975年卒・医学博士・緩和医療学	滋賀県立成人病センター緩和ケア科・乳腺外科, 緩和医療学, サイコオンコロジー	主任部長
所 昭宏	肺がん患者及び家族へのグループ療法の方法の確立とその効果判定	関西医科大学・1992年・心療内科	国立病院機構近畿中央胸部疾患センター・サイコオンコロジー, 心身医学	心療内科医長
長谷川 聡	患者・看護師などによるがん患者へのグループ療法の実施と適応	上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了・1972年卒・文学修士・言語学	北海道医療大学看護福祉学部・コミュニケーション学, 福祉情報学	准教授 情報センター技術主任 (技術開発担当)